

サヨナラ、我が家。

作 日下 渚

◆登場人物

- 佐々木総二郎（27-44-62）
佐々木幸枝（22-39-57）
佐々木春樹（16-34-60）長男
佐々木千夏（12-30-56）長女
白石秋穂（10-28-54）次女
白石正嗣（24-50）次女の夫
佐々木聖（26）千夏の娘
白石かのん（25）秋穂の長女
白石虎太郎（20）秋穂の息子
白石もえ（18）秋穂の次女
鶴田ヨネ（54-80）お隣の奥さん
鶴田舞（12-30-56）ヨネの末娘
古城譲司（16-34-60）春樹の友人
園田良子（35）空き家サポーター

静かにテレビの音が聞こえてくる。

舞台に明かりが入ると古い日本家屋の居間と次の間が浮かび上がる。

居間の奥は廊下へ続く襖、居間の上手側は庭になっていて、垣根が見える。冬の庭は色が寂しく手入れもされていない。垣根の向こうには（見えないが）玄関がある。

下手側にある次の間には洋服箆笥。カレンダーがかけてあるが、一昨年のものである。

次の間の下手側はガラス戸になっていて、その向こうは台所になっている。

二〇一九年十二月末の午後。

居間の真ん中に置かれたコタツに入っているのは、聖、かのん、虎太郎、もえ。だらしのない格好で居間の下手奥に置いてあるテレビを見ている。テーブルの上にはカゴに盛られたみかんやお菓子、雑誌等が雑多に置いてある。

皆、それぞれぼんやりとテレビを眺め、お菓子やみかんを食べている。部屋の隅には、片付け途中の様でダンボールやビニール袋が置かれている。

上手の垣根の向こうに、園田の姿が見える。訪ねる家を探している様子。

玄関のチャイムの音。

四人は少し反応するが、コタツから動かない。

そして、またチャイムの音。

四人は他の誰かが出ないのか目で探すが誰も出ず、ついに聖が嫌々立とうとする。

園田の声　ごめんくださーい！

千夏の声　はーい！

声を聞いてすぐにコタツに戻る、聖。

下手台所から忙しそうに入って来る千夏。

千夏　あんだ達……そこ、片付けよ！　秋穂ー。正嗣さーん。

千夏は廊下に出て玄関へ向かう。

コタツに入っていた四人は急に部屋を片付け始める。

玄関から千夏と園田の会話が聞こえてくる。

園田 こんにちは！ 初めまして、園田です！

千夏 初めまして、長女の千夏です。すみません。こんな年末のお忙しい時にお越しいただいて。

園田 いえいえ！ 私も実家が近いんで！ 車は向こうの砂利の所で良かったですかね。

千夏 ええ、そこで大丈夫です。

園田 あそこも佐々木さんの土地なんですか？

千夏 いえ、あそこはお隣さんのところで、いつも停めさせてもらってるんです。

園田 そうですか。

廊下をバタバタと下手から玄関へ秋穂と正嗣が通る。

秋穂 どうもすみません

正嗣 そのちゃん、わりいなあ！ 休みの時やのに！

秋穂 すみません、二階の掃除してて気づかなくて：

園田 初めまして！ 園田です。奥様ですか？ お噂はかねがね：

秋穂 どんな噂しちよんの、あんた。いつも主人がお世話になっております。さ、どうぞ。

居間に姿を見せた園田は、寒そうに立って挨拶を待っている四人を見る。

園田 ああ、皆様お揃いで：

正嗣 話してた、NPOの園田良子さん！

園田 初めました。空き家サポートおおいの園田と申します。

正嗣 義姉の千夏さんと、娘さんの聖ちゃん。こっちは、俺の子どもの、かのん、虎太郎、もえです。

千夏 よろしくお願いいたします。

園田 皆さん、どうぞよろしくお願いいたします！ すみません、あの、どうぞ、みなさん気楽に構えていただければ：

秋穂 そうよなくこんな並んで。ほら、みんな、座って座って。ごめんね。

千夏 園田さん、どうぞ掛けられてください。聖。

聖 はい。

かのん 私も行く

もえ もえも

聖とかのんともえはお茶の用意に台所へ入っていく。

園田 えー：っと、あと一番上にお兄様がいらっしやるんですよ。

正嗣 うん。

千夏 すみません、兄がちよっと今出てまして：

秋穂 急に友達から呼び出されたみたいで。

虎太郎 おじちゃん、友達とかおったんやー。

正嗣 くら！

千夏 すぐ戻ると思います。

園田 大丈夫です、大丈夫です！ バリバリ待ちます！

秋穂 早くお里に帰りたいでしょようにね

園田 大丈夫です！ 帰ってお正月の準備手伝わされるよりずっといいです！

秋穂 (笑) 園田さんこそ噂通りやわ

正嗣 忘年会で、ついお願いしちゃったんよ。そしたら、少しでも力になれるならっち。

いい人やろ

秋穂 ついお願いしても、普通年の瀬にわざわざ来てくれんっちゃ！ どこに相談して
いいかわからなかったけん、本当にありがたいわ。

千夏 そうそう。家族だけで話しても何も進まなくて：家の片付けも全然進まんし：

園田 そうですよ、皆さんそうおっしゃるんですよ。えー：お母様が半年前にお亡く
なりになられて：家は相続済み、ということでもいいんですよ。

千夏 はい、兄が相続しています。

正嗣 え、そもそも相続せんっち人もおるん？

園田 余計な税金払いたくないって、時々相続放棄したいって人はいますけど：買い手がつくまで管理責任があるって知らない方が多いんですよ。すぐには売れないですからね。

正嗣 はくそうなんやなあ。

虎太郎 本当や、意外としっかりしちよん。

秋穂 虎太郎！ 失礼やろ！

園田 あ、大丈夫です！ 意外とやれる女、園田です。

千夏 園田さん、あの、やっぱり、管理できないとしたら、売るしかないですよね：？

園田 あ、そうとも限りません！ 早めに「売る」っていうことは勿論、色々なコストがかからない一つの選択肢です。でも最近は、地方に移り住む方へ住居を「貸す」ですとか、リノベーションして新しい使い道を考える方もいらっしやいます。

千夏 貸すっち言っても、こんなとこでなあ。

秋穂 リノベーションか：その時点で、この家ではなくなるんよね、結局。

園田 まあ：そうかもしれないですね。あ、こちらで借りたい方を募ることはできます。

正嗣 でも、貸すにしても、水回りとか修理したり：そういう費用はかかってきます。そういう色々が面倒で、空き家になっていくんかなあ。多いよな、最近。

聖とかのんともえ、台所からお茶と茶菓子を持ってきて園田の前に置く。

ついでに自分達にもお菓子や飲み物を持ってきている。

虎太郎 え、空き家っちそんな多いん。

秋穂 この辺なんか空き家だらけで。

正嗣 家族がおつても、管理できんで放置しちよんのやろうなあ。

園田 放置すると問題なのは、例えば浮浪者が住み着いたり、崩れて誰かが怪我をした
り、周りに迷惑をかけてしまう可能性があるってことですね。それで自治体は空
き家はそのままにせず壊して欲しいって言うんです。

秋穂 あ！ あつたなあ、なんか逃亡犯が空き家に潜んでたーっち：

千夏 あつた、あつた！

聖ほんと、空き家っち、ちよつと怖いよね。

もえ そう？ もえ、ちっちゃい時遊んだことあるよ。

聖 ええっ

秋穂・正嗣 ええっ

園田 ああ、そういうのが一番危ないんです！

もえ 兄ちゃんが面白そうやけん行こうぜ行こうぜーっち。

正嗣 虎太郎！

秋穂 あんたなあ！

虎太郎 そんな昔のことで今更怒られても：

かのん もえ、何もなくて良かったなあ。

もえ あんまりわかってなかったわー

秋穂 うちん子は、もう：

虎太郎 でもさ、何でみんな売らんの？ 売ったらいいやん。

秋穂 こんな田舎の古い家、買いたい人もそうそうおらんやろ。うちもそうやけど、築五十年六十年で。耐震強度もないやろうしなあ：

虎太郎 壊せばいいやん。土地売ればお金になるやろ？

正嗣 簡単に言うな、お前はー。

秋穂 本当よ！ 土地にしたら税金上がるし、かといって家壊すのもお金かかるやろ。

園田 ああ、家を壊したら固定資産税が増えるって思ってる方が結構いらっしやるんですけど、違うんですよ。元々の固定資産税を一としたら、住居を建てるのと六分の一になるんです。そして住居の固定資産税がかかります。それが、家を壊すと一に戻って、家にかかっていた固定資産税はなくなるわけなので、正直：そこまで変わらないんじゃないかと：

千夏 あ、そういうことなんですか：！

虎太郎 でも面倒くさそうやけん、色々考えんでサクッと壊して売ればいいやん。

秋穂 虎太郎！ あんたもう黙っっちゃって！

かのん お母さん、このお菓子食べていい？

秋穂 食べればっ！

もえ やったー

聖 おばちゃん、大丈夫？ どうどう：

園田 でも、一番難しいのは、やっぱりご家族のお気持ちですよね。

千夏 そうなんですよね：管理できない以上、手放さないといけんのはわかってるんですけど：「壊す」っち：なあ：

秋穂 この家がなくなるとか考えられんよなあ。

千夏 うん：

聖 私も、ばあちゃんちがなくなるのは嫌やなあ

かのん そうやなあ

秋穂 兄ちゃんが、なあ：

虎太郎 あ、わかった！ おじちゃん、「早く売ってしまえ」っち言いよんのやろ。

かのん おじちゃん、言いそうくばあちゃんにも冷たかったし：そういうとこ淡泊そう。
正嗣 そんなことないやろ。

かのん だって、いっつもおばあちゃんにイライラしちよったっちいうか：

もえ ばあちゃん可哀想やったよなあ！

聖 おばあちゃん、のんびり屋さんやったけんね。

かのん …（笑）そうやったよね。

もえ ばあちゃん：可愛いかったよなあ：

かのん 忘れん坊でな：。いっつも、「あ、いけん」っち！

皆、それぞれに笑い合う。

千夏 そうそう、あの忘れん坊があったけん、認知症になっても、ちよっと救われたっちゆうか…。

正嗣 わかります、わかります。

秋穂 昔っから、お母さんが「あ、いけん」っち言う度に兄ちゃん、ため息ついて。

園田 なるほど…では、お兄さんは売りたいとおっしゃっていて、皆さんはまだ決心がつかない…ということですね！

千夏 え？いやいや、逆です。

園田 え？

虎太郎 は？

秋穂 私たちは、色々考えた上で、やっぱり処分するしかないと思うんよ。兄ちゃんは神奈川で、姉ちゃんは福岡…私は大分やけどここから車で一時間…自分の家だつてあるし、生活あるし…やけど…兄ちゃんが…

そこに、突然春樹が襖を開ける。

皆、驚いて春樹の顔を見る。

春樹 話すことなんかない。帰ってもらえ。

千夏 : ちよつと、兄ちゃん。

春樹 俺が相続した家や。俺が決める。

春樹は不機嫌そうに去っていく。

千夏 ちよつと:(園田に)すみません! : ちよつと、兄ちゃん!!

千夏は春樹のあとを追って出ていく。

正嗣 そのちゃん、ごめんな! : !

秋穂 ごめんね! : ! お願いしたのはこちらやのに、あんな失礼な言い方!

園田 いえいえ! 大丈夫です! お気持ちはよくわかりますので。

秋穂 本当にすみません

虎太郎 さすがやな:

かのん こわく: 私が言ったの、聞こえちよつたかな:

もえ 絶対聞こえちよつたわ: 兄ちゃんと姉ちゃんのせいや。

かのん あんたもやる!

聖 誰のせいでもないよ。

秋穂 あー：どうしよう：

園田 あの、私がいって話にくければ、今日色々資料とか持ってきたんで、ゆっくり見
ていただいて：

正嗣 ああ、ありがとう。

秋穂 私たちだけでも、お話しさせてもらえて、すごく勉強になりました。また、聞きた
いこと、お電話とかしてもいいですか？

園田 はい！ 勿論です！ いつでも、どうぞこいです！

秋穂 (笑) ありがとう！ 兄とは：それを踏まえてゆっくり。

園田 はい。じっくり相談されてください。うちのメンバーには、弁護士や行政書士とい
った法律のエキスパートもおりますので。

秋穂 ああ：なんか、安心した：。やっと進められそうや：正嗣さん、本当にありがと
う。

正嗣 本当、ありがとうな、そのちゃん！

園田 いえ、もし休みの間に話が進めば、私もまた来れますんで。

虎太郎 話、進むかなあ

皆、春樹の去った方を見て、ため息をつく。

園田が資料を渡して去っていく。

秋穂と正嗣は、それを見送り、玄関へ出る。

聖とかのんはお茶を片付け、虎太郎ともえはこたつに戻る。
秋穂と正嗣が戻ってくる。

秋穂 もう！ 何なん、兄ちゃん！

正嗣 まあ、前もって話してたけん。また電話でも、ゆっくり相談したらいいわ。

秋穂 本当、ありがとな。ああいう方なら相談しやすいわ。でも：もう、兄ちゃん！

虎太郎 でも、意外やな。

秋穂 何が！

虎太郎 おじちゃん、この家、壊したくないんやなーっち。俺の知る限り全然こっちに帰らんし、ばあちゃんにも冷たかったし。

もえ ほんと。

秋穂 ：そりやあんた：育った家やけんなあ。

正嗣 なあ：。

秋穂 古いし、隙間風入るし、雨漏りもするけどな：。やっぱりこの家なんよなあ：

もえ 確かにこのまま売ろうと思っても売れんかもね。

秋穂 そうなんよな：でも、兄ちゃん、今になって：母さんの介護なんかほとんどせんかったくせに：

正嗣 仕事しよんのやけん。

秋穂 男はすぐそれを言い訳にする！

正嗣 うっ…ゴホゴホ…（咳をするフリ）

かのんと聖、戻って来る。

かのん お母さん、台所の段ボール散らかしたままやん。

秋穂 え？ あ、そうやったっけ。

正嗣 さっき二階片付けよっても、アルバム見つけてから見だして、そっちも途中になっちょんで。

秋穂 （笑）何か進まんのかなあ。色んな思い出があってさあ

虎太郎 お母さん、家でも同じやん。

もえ 言えてる…！（笑）

秋穂 うるさいなあ！ お父さんお母さんのものは処分しきらんのよ…ほら、あのカレンダーでさえ、変えきらん。

聖 え？（カレンダーを見て）あ！ これ、今年のじゃない！ いつの??

かのん え！ まじで！

もえ え、全然気付かんかった！

秋穂 お母さんの字が残っちょんもんやけん…

聖 本当や。ばあちゃんの字：『病院』ばっかりやなあ。買い物するものも書きちよん。

秋穂 書かんと忘れるけんなあ。

かのん よく縁側にぼうつと座っちよったね。

秋穂 そこが好きやったけん。

聖 (縁側に目をやる) あれ? 鶴田さん。

かのん え?

いつの間にか、垣根の向こうに、鶴田親子(ヨネと舞)が顔を覗かせている。

鶴田親子 あっ。

鶴田親子は隠れようとするが、隠れられていない。秋穂、縁側に出る。

秋穂 ヨネさん、舞ちゃん! どうしたん?

ヨネ え? ああ、いや

舞 いやね、なんか、車が来ちよったから:(縁側に回ってくる)

秋穂 あ、車止めさせてもらうて、いつもすみませんねえ。

舞 ああ、そりゃいいんよ。どうせ空いちよんのやけん、あのー:不動産の人ね? さ

っきの:

秋穂 ああ：空き家サポートさんって、この家のこと、相談をしようと思うてな。
ヨネ やろうなくそうやと思うたんよ。(段々と家の中に入って) あ、ちよっといい？
秋穂 どうぞどうぞ。

虎太郎 もう入りよんやんなあ。

舞 おじやまします

ヨネ この辺、どげーかならんかなあ。空き家も多いけど、一人暮らしん老人ばかりで。ほら、裏の山んとこの空き家も、だいぶ傷んじよって見た目もわりいやろ。さっちゃんは幸せやわ、こうして子ども達がちゃんと後のことを考えてくれるんやから：私もなあ、子どもたちに迷惑かけんように、元気なうちに色々決めちよかななあっち思うちよるんよ。

舞 お母さん、意外と考えちよんのやなあ。

ヨネ 当たり前やねーな。(舞と二人で特徴的な声で笑い合う)

虎太郎 出たー

秋穂 あゝこの笑い声聞くと：ほっとするわ

もえ ほっとするんや！

虎太郎 ほっとはせんやろ！

かのん うける(笑)

聖 ねえ、おばちゃん。ばあちゃんは、遺言とかで家のこと言ってなかったん？

秋穂 ああ、子どもたちに任せるっち言いよったけど：わからんくなってきて、遺言書

とか書けんでなあ。

聖　　そっか…。

舞　　幸枝さん、毎日んことで精一杯やったんよねえ。

ヨネ　　そうよなあ…

千夏　　ああ、もうっ！　腹立つっ！

千夏、乱暴に襖を開けて戻ってくる。その姿に鶴田親子は大笑いする。

千夏　　あ、おばちゃん、舞ちゃん！

舞　　ちいちゃん。元気そうやなあ。

千夏　　ああ、ちよっと、兄ちゃん…（笑）

舞　　春ちゃんかー変わらんなあ（笑）

千夏　　おばちゃんと舞ちゃんの笑い声も変わらんけどなあ！

虎太郎　　おじちゃんとおばちゃんっち、昔からああなんや（笑）

千夏　　わかるやろー？　兄ちゃんと私。

秋穂　　気が強いもの同士。

もえ　　お母さんは？

秋穂　　わかるやろ？　奥ゆかしいけん。

虎太郎　　ビビって、わたわたしよったんやろ。

正嗣 正解っ！

かのん うわゝ目に浮かぶゝ！

秋穂 うるさいなあ、あんた達は本当に…！

ヨネ いやゝ思い出すわゝ…：ようケンカしよったけど…：あん時もあんた達、すごかったなあ…：ほら、田舎はそげえなかったけど、急に景気悪うなった頃よ。

かのん え、いつ？

ヨネ もう三十年くらい前。

聖 バブル崩壊の頃かなあ？

ヨネ そうそう！

舞 こんな風に、年末に皆帰って来たんやけど…

千夏 またその話…

ヨネ 忘れもせん！ 総ちゃんときさっちゃん、大変やったと思うで…だってあんた達…

鶴田親子、千夏と秋穂を見て大笑い。

聖 何、何？

千夏 もう忘れて欲しいわあ…

ヨネ あんたも大変やったなあ。

鶴田親子、正嗣を見て大笑い。

正嗣 いやゝ：忘れて欲しいですわ：

虎太郎 父さん、何したん。

舞 忘れられんなあ。正嗣さん、ここ、ちようどこでこう：（縁側を指差す）

正嗣 ちよっと：いや、よく考えたら何で鶴田さんが知ってるんですか！

かのん え、何？ 教えて、教えて！

もえ 気になるー！

秋穂 もう、どれくらい前やろうか。あ、そうよ、聖ちゃんが二十六歳やから。

千夏 二十六年前やわな。

鶴田親子と千夏、秋穂、正嗣は笑っている。

孫たちはその意味がわからないところで、ストップモーション。

明るい音楽と共に、皆ゆっくり動き出し、舞台が変化していく。

家族みんなで、楽しそうに家の家具を入れ替えていく。

テレビやたんす、少しずつ時代が変わっていく。

二十六年前の舞台が整うと、ふと音楽が止まる。

一九九三年の年末。午後三時頃。

あたたかい居間。ストーブにやかんが置かれている。

こたつの傍にはポットとお茶。庭は手入れがされている。

五十七歳の幸枝が入ってきて洗濯物を引き出しに閉まっている。

幸枝 (思い出して) あ。あ、あ、いけん、いけん：

幸枝は一度台所へ行って確認をして戻って来る。

幸枝 お父さん。：お父さーん！

六十二歳の総二郎が居間に顔を出す。

総二郎 なあ、毛布、新しいのがあるっち言いよったよなあ

幸枝 あ、客間のお縁に。

総二郎 ああ。(戻ろうとする)

幸枝 ねえ、お父さん。またスーパー行ってもらえん？

総二郎 何かえ、また買い忘れな。

幸枝 お砂糖が少なくなっちゃったの忘れちゃったんよ。

総二郎　しょうがないのう

そこに三十四歳の春樹が顔を出す。

春樹　買って来ようか。

総二郎　おお、春樹がおった。頼むわ。

幸枝　春ちゃん、ごめんな。

春樹　どうせ暇やし。他にない？　母さん絶対後から言ってくるけん。

幸枝　あ、そうやね、そうやね、待って。見てくるわ。

幸枝は台所に戻っていく。春樹はため息をついて、こたつに入る。

総二郎　春樹、ついでに駅に秋穂迎えに行ってくれんな。

春樹　え？　秋穂、電車なん？

総二郎　安定期入ってるけんっち言うんやけど。

春樹　この寒いのに、妊婦が三十分歩く気か。ったく：

総二郎　車が故障でもしたんかのう

春樹　旦那とケンカに決まっちょんやろ。

総二郎　えーまたな：

春樹 子どもができるっち言うのに、いつまでも子どもみたいに：（ため息）

幸枝 （顔を出して）春ちゃん、刺身醤油も少ないわ。あとは大丈夫。

春樹 わかった。行ってくるわ。

総二郎 気いつけえよ。

春樹は家を出ていく。それを心配そうに見つめる総二郎。

総二郎 大丈夫なんか、春樹は。

幸枝 心配されるんも嫌なんよ。外に出る方が気が紛れるかもしれんし。

総二郎 昼は食べたんか？

幸枝 ：バナナだけ。

総二郎 何かえ：こっちにおる間だけでも、栄養あるもん食べさせんと。

幸枝 今日はいいお肉買っちよんけん、すき焼き！ やけど、食べられるやろか、あの

子：。神奈川戻るんやなあ：もう、こっちに帰って来たらしいに：

総二郎 ：そういうやつやろ。

幸枝 ：そうやな。

総二郎 こんなに布団出すんは久しぶりやなあ。春になったら、赤ん坊か。

幸枝 信じられんなあ。

ヨネの声 さーっちゃん。

幸枝 あ。はい。

ヨネが庭先に顔を出している。総二郎は奥に入っていく。

幸枝 ヨネさん、寒いやろ。入って。

ヨネ あゝさみ、さみ。まだみんな帰ってないんか？

幸枝 うん。春樹は昨日から帰っちゃんだけど、千夏と秋穂は今日帰るんよ。(お茶準備をしながら) そっちは？ みんな帰ってきちよるね？

ヨネ ああ、孫が三人になって、賑やかにやっちよるわ。

幸枝 いいなあ。私も春になったら、とうとう、おばあちゃんや。

ヨネ 大変で、お金が、あってもあっても、飛んでいくで。：ほんで、春ちゃんといちちゃんは：結婚は？

幸枝 それが、全然。うんともすんとも。

ヨネ そうな。：

幸枝 春樹はね、ほら、会社があんなことになって、今新しい仕事探しよるとこやし：それより、心配なんは、千夏よ。

ヨネ そうよ、もう三十なるんやないん？ 子どものこと考えると、もう：

幸枝 仕事が好きな子やから、もしかしたら家庭を持つ気がないんかもしれんわ。今年はお盆も帰って来れんでね。

ヨネ あんなあ、あのー：その、なあ：（抑えきれない笑い）

幸枝 んん？ ど、どうしたん？

ヨネ いや、あのー：古城さん、おるやろ。古城酒店の。（抑えきれない笑い）

幸枝 う、うん。春樹の同級生が後継いで。

ヨネ そうそう、その、譲司くん：

幸枝 譲司くんなあ、なんか春樹は変なあだ名で呼びよって。

ヨネ 譲司くんなんか、どうね？

幸枝 ：え？

ヨネ やから：ちいちゃんよ。

幸枝 ：お見合い？

ヨネ （大きく頷く）

幸枝 ：いや、あの子、デザインの仕事したくて福岡に出ちよんけん：酒屋は：

ヨネ ええ？ いい子なんでくものすごくいい子。男前ではないけど、いい子なんやろ。

何かな、実は昔っから、ちいちゃんのこと好いちよったみたいなんやわろ（笑）

幸枝 ええ、そうなん？ ：まあ、一応、軽く、聞いてみるわ。

ヨネ もし、こっちに帰ってくれたら、さっちゃんも嬉しいやろ？

幸枝 ：まあ：ねえ。

ヨネ ちいちゃんがあったかくい家庭を持ったら、さっちゃん、嬉しいやろ？

幸枝 それは、嬉しい！

ヨネ な！

幸枝 うん！

千夏の声 ただいまー

ヨネ あ！

幸枝 噂をすればや！ 千夏、帰ってきた！ 千夏、千夏、ちよっと！

襖を開ける、三十歳の千夏。どう見ても、臨月の妊婦である。
言葉を失う、幸枝とヨネ。

幸枝 …え？

千夏 …報告遅れてごめん。

幸枝 ……え？

千夏 ちよっと…言い切らんくて。

幸枝 ……。

千夏 …お父さん、おる？

幸枝 うん…お父さん。お父さーん…！（総二郎を呼びに部屋を出る）

ヨネ …えっと、私は…

千夏 おばちゃん、ごめんね。タイミング悪かったね。

ヨネ いや…うん。うん。えっとー、とりあえず、家に帰るわ。

千夏　ごめんね。

ヨネ、出ていく。千夏は座って、ため息をつく。

総二郎と幸枝が部屋に入って来る。総二郎は険しい顔をしている。

千夏、立ち上がる。

千夏　：報告、してなくて：あの：相談もしてなくて：ごめんなさい。

総二郎　父親は？

千夏　ごめんなさい。父親には、なってくれん。一人で産んで育てようと思っちゃん。

総二郎　何かそれは：どういうことなんか。お前、そいつは：何で：何かそれは：

千夏　私が悪いに。私が：。自分で選んだんよ。全部、私が悪い。ごめん：

総二郎　お前：何でもっとはよう言わんのか：もっとはよう：

千夏　ごめんなさい：ごめんなさい！

幸枝が千夏に近づき、千夏は少し身体を小さくする。

幸枝は目線を千夏のお腹に合わせ、お腹を触る。

幸枝　おめでとう、千夏。

千夏は線が切れた様に泣き出す。

総二郎は千夏の頭をぽんと叩く。幸枝は千夏を座らせ、背中を撫でる。

総二郎　：お茶、飲むかえ。

幸枝　お願い。(背中をさすりながら)きつかったろう：しんどかったなあ：

総二郎　：(頷く)

幸枝　疲れたやろ、こんなお腹で、一人で長いこと運転してきて。：何か食べる？　あ
んたの好きなパン買ってるんよ。

千夏　パン？

幸枝　イチゴジャムのパン。

千夏　ジャムパン：

幸枝　お父さん、台所のパン、持ってきて。

総二郎　どこな。

幸枝　テーブルに置いちょん。

総二郎は台所へ向かう。お茶を飲み、少し落ち着く千夏。

幸枝　もう、ごめんは言いなさんな。赤ちゃんが可哀想や。

千夏　：(頷く)

すぐにジャムパンを持って戻って来る総二郎。

総二郎　これやな。これ、うまいよなあ。

幸枝　お父さんも食べる？

総二郎　ちよつともらおうかなあ。

千夏　お母さんは？

幸枝　：ちよつともらおうかなあ。

三人でジャムパンを食べる。何だか自分たちが滑稽で、少し笑い合う。その時、垣根の向こうに鶴田ヨネと舞（三十歳）が覗き込む。舞は赤ん坊をおんぶしている。

舞　　どういふこと？　パン食べて笑いよんけど。

ヨネ　あれ？　おかしいなあ、修羅場かと思ったんやけど：

舞　　本当や、ちいちゃん、妊婦さんになっちよん。いや、未婚の母になるんかなくやるなくさすがちいちゃん。

ヨネ　まだわからんやろ？　これから結婚かもしれんで？

いつの間にかその隣に古城讓司（三十四）が顔を出す。
手土産に酒を持っている。

讓司 何してるんすか？

ヨネ・舞 うわっ！

ヨネ 讓司くん！

舞 どうしたん、こんなとこで！

讓司 こんにちはっす！ …いや、だって、ねえ、ヨネさん！

ヨネ あー…

讓司 ほら、回りくどいことするより、会った方が。

舞 あんた年末の忙しい時やのに。酒屋大丈夫なん？

讓司 大丈夫、大丈夫、父ちゃんおるけん！ おしろ父ちゃんに渡されたし（お酒を見せる）

ヨネ 讓司くん、ちよっと話があるんやけど…

讓司 春樹も帰っちよんみたいやし、ちよっと、顔出して来ますわ！

ヨネ あ！ ちよっと…！

舞 どしたん？ 母さん。

ヨネ ……面白いけん、ちよっと見ちよこう。

舞 え？

讓司は玄関に周り、チャイムを鳴らさず、すぐドアをあける。

讓司 ごめんくださいーい。

幸枝 はいはいーい。(玄関へ向かう)

千夏 誰やろ。

幸枝の声 ああっ！ えーっと！

千夏 何、何？

総二郎 どした？

幸枝の声 あのねえ！ 春樹はあ今あちよっと！ 出てましてえねえ！

千夏 お母さん様子おかしくない？

讓司の声 もう、何すかくおじやましまゝす

讓司が居間に顔を出し、千夏の姿を見て、酒を落としそうになって豪快に倒れる。

千夏 きゃー！

総二郎 びっくりした！ 何かえ！

讓司 いやーいやあのー

幸枝 讓司くん、あの、また、ゆっくりお話を：

千夏 讓司：ああ、兄ちゃんの友達の！ えーっと、なんか変なあだ名の。

讓司 はい：古城讓司、通称ジヨジヨです。

総二郎 ジヨジヨ！

千夏 そうそう、ジヨジヨ！ わー懐かしい！ 全然変わりませんねえ！

讓司 千夏さんもお変りなく：（表情は真逆）

総二郎 何なん、ジヨジヨっち。

讓司 決して奇妙な冒険とは関係ありません。でも言わせてもらえれば、俺の方が歴史が古いです。元祖ジヨジヨです。

幸枝 え？ 奇妙？ どういうこと？

千夏 お母さん深く考えんていいよ。

総二郎 春樹なら、ちよつと今出とるんや。わざわざお酒持って来てくれたん？ ありがとうなく

幸枝 お正月にみんなでいただくわ。

讓司 春樹くんに久しぶりに会いたくて：ええ、それで来ました。

千夏 兄ちゃんの友達なんかジヨジヨだけやったもんな。

総二郎 あー：ちよつと、聞いちよんかもしれんけど、春樹の会社もダメになっしてしもうて、向こうで大変でな。ああいうやつやけん、弱音を吐けんと思うんやけど、

讓司くん：あ、ジヨジヨ？

譲司 譲司くんで大丈夫です。

総二郎 譲司くん、あいつの力になってやってくれんかな。

譲司 わかりました。でも、春樹なら大丈夫っすよ。いっつも誰にも負けんかったすから。

千夏 それが厄介なんよなあ：

幸枝 譲司くん、お茶飲んでいかんね？

譲司 いえ：今ちよっと、心がざわついているので、一度店に戻ります。

幸枝 ああ：

千夏 え？？

譲司 お邪魔しました！ 千夏さん、お幸せに：！

譲司、足早に去っていく。

千夏 何なん、変なの：。

譲司が通り過ぎて、鶴田親子は気まずそうにコソコソ去っていく。

総二郎 何か、今そこ、誰かおらんかった？

幸枝 気のせいよ、きっと。

千夏 (讓司の酒を見て) あゝいいお酒や。飲みたかった!

幸枝 当分飲まれんね。酒好きにはきつかるう。

千夏 きついわく

幸枝 病院には連絡してるん? 予定日は?

千夏 一月二十六日。

幸枝 そうね、そうね:(カレンダーに書く)

千夏 こっちで産んで、いいかな:

幸枝 :(総二郎を見る)

総二郎 : 秋穂の子の為に色々準備しちよんけん: 丁度良かったのう。

幸枝 (笑) 本当やな。

千夏 ありがとう:。

総二郎 そうや。来月、改装頼んじよったろ、客間。はよしてもらわんとこのう。

幸枝 そうやな。お部屋を暖かくしちやらんとね。

千夏 ごめん。

幸枝 ほら、また「ごめん」っち言った。

千夏 あ、ごめ: いや、ありがとう。

幸枝 それより、産院、あの、高松先生んとこしかないんよね。大分の大きい病院にせんでいい?

総二郎 でも、いざっちいう時に近い方がいいやろ。

千夏 もう高松先生に電話はした。喜んでくれたわ。お父さんお母さんによろしくっち。
幸枝 えゝ：大丈夫なん、もうじいさんで！

総二郎 そう言うなよ：

秋穂の声 ただいま

千夏 あ、帰ってきた。

秋穂と春樹、襖を開けて、千夏の姿を見て、持っていた荷物を落とす。

秋穂 え？！

春樹 は？！

千夏 はい、ごめんなさい。一人で育てます。

幸枝 あんた、簡単にまとめすぎや：

千夏 もう私的には解決したけん、また一から話すのよだきいんやもん：

春樹 何なん、どういことなん！

秋穂 結婚せんで、産むってこと？ 父親は？！

千夏 自分で、一人で育てるっち決めたけん。

春樹 はあ？

幸枝 まあ：もう、あと一か月なんよ。私たちがあたたかく受け入れてあげな、この子
(お腹の子)が可哀想やないね。

秋穂 えー姉ちゃんが先に産むん：！ これだけは勝ったと思ひよったに：

幸枝 そんな勝ち負けじゃないやろ。

春樹 お前な、簡単やねーんぞ！ 子ども産んで育てるっちいうんは：お金はどうする

んか、お前：

千夏 貯金あるし：また働くし：兄ちゃんには迷惑かけんわ！

春樹 そういうことじゃねーわ！

総二郎 春樹、落ち着け。

春樹 世の中舐めちよんのや、お前も、秋穂も！

秋穂 何で私も：

千夏 舐めてないわ：兄ちゃんに何がわかるん：兄ちゃんは自分の心配したらどうな

ん！

春樹は怒って部屋を出ていく。

秋穂 ：何なん、もう：

千夏 兄ちゃんは想像通りの反応や：（ため息）

幸枝 ストレスは良くないで。落ち着いて。

秋穂 いやいやいやいや。落ち着けん。私、全然落ち着けんわ。なんで姉ちゃん臨月な

ん。いやいやいや、おかしいおかしい：

総二郎　それで、お前はどうしたんな。一人で電車で。

秋穂　ああ：ちよつと：。何かもう別れようかなーっち思つて：

みんな、秋穂を見る。

幸枝　お父さん：

総二郎　何て日だ：

千夏　どうしたん、正嗣さんとケンカなんか、しよっちゆうやん。別れようとか簡単に口に出したらいけんよ。その子のお父さんは、お父さんになつてくれる人なんやから。ありがたいことで。

総二郎　おい、説得力が違うな：

幸枝　お父さん：！

秋穂　あん人は、基本的に私をバカにしちよんのよ。ほら、実家、お金あるし：都会の方やん。私のこと田舎もんっち思っちよんし：

千夏　そんなん、誰だつて思うことっちゃ。

総二郎　別れるようなことじゃねーやろ：

秋穂　：わかつちよんのやけど：許せんくて、向ここの実家帰る準備してたんやけど：しれつとこつちに帰つてきた。

千夏　心配しちよんやろ、正嗣さん。あんた身重なんやけん。

幸枝 秋穂、千夏の言う通りよ。若い時と同じじゃいけないのよ。

秋穂 私も一人で育てる。

千夏 はあ？

秋穂 姉ちゃんがそうするなら、私もそうする。

千夏 あんた：

総二郎 お前には無理や。

秋穂 何で？ 姉ちゃんは大丈夫で、私は無理なん？ 何でよ！ いったもそうや！

幸枝 秋穂、ちよつと落ち着きよ。ほら、あんたの好きなチョコレート買ってきちよん

けん。お父さん。

総二郎 今度はチョコレートか：

秋穂 みんな、私のことバカにして：一人じゃ何にもできんっち：

秋穂、居間を出ていく。幸枝が追いかけてようとするが、千夏が止める。

千夏 私が話す。

千夏は居間を出ていく。総二郎はぐったり横になる。

幸枝 お父さん、大丈夫？

総二郎 どげしたもんやろうか、うちん子達は：

幸枝 本当になあ：（秋穂達が落とした荷物も見て）あ、お砂糖と刺身醤油。よかった。
夕飯の準備せんと。

総二郎 夕飯の準備ってお前：

幸枝 大丈夫よ、みんな。ご飯食べれば落ち着くっちゃ。

総二郎 本当かえ：。

幸枝は荷物やお湯呑み等を持って台所へ去っていく。

総二郎 電話いれちよくかの：

総二郎は廊下に出ていく。

一時間程後。日が落ちて暗くなっている。

総二郎が新聞を持って入ってきて、こたつに入る。

千夏が台所から小皿や箸、コップなどを運んでくる。

総二郎 お前、大丈夫か？

秋穂 （台所から顔を出し）姉ちゃん、そっち座っちよって。

千夏 大丈夫っちゃ。

秋穂 いいけん、今日は疲れちよんのやから。お父さん、ビール飲む？

総二郎 おう。千夏、座っちよけ。

千夏 秋穂も疲れちよんのやないん？

秋穂 私は大丈夫。

千夏 はく：この家は冷えるなあ：（上着を着て、少し横になる）

総二郎 ああ、立て付けがわりいいけんなあ：すまんなあ。

千夏 夏は涼しいけどな。

総二郎 虫も入るけどな。

千夏 （笑）

垣根の向こうに走り込む人影。玄関のチャイムの音。

総二郎 俺が出るわ。

そこに真剣な顔をした正嗣（二十四）が現れる。

総二郎はその後ろから戻って来る。

正嗣 （千夏の背中を見て）秋穂：心配したぞ。ごめん。お前がそんなに傷ついてたな

んて：知らんくて：無事でよかった：

千夏 （状況を察して）えっと：

正嗣 ああ：何か、いつの間にか、お腹が大きくなったな：おかしいな、俺、お前のこ
とちゃんと見てなかったのかな、今まで：俺は大馬鹿者や：

総二郎 正嗣くん。あんな：

正嗣 本当にごめん！ 戻って来てくれ：秋穂！

正嗣、千夏の肩を掴む。秋穂、台所から出て来ている。

秋穂 誰に言いよるん。

正嗣 ええええっ：！？ 何で、（目の前の千夏の顔を見る）え！ お義姉さん、ええ、
ええええっ！？

千夏 ああ、もう、よだきい：

総二郎 ちょっと一回落ち着いて、な。まあ、座って。秋穂も、ちょっと座れ。

正嗣は座るが、秋穂は立ったまま。

秋穂 ：わかって謝りよんの？

正嗣 う、うん：何か田舎もんやっち、一人で何にもできんっち言われよるように感じ

てた：んやと、お義父さんが。

総二郎 しっ：

正嗣 いや、てことは、あれやろ。里帰り出産するなっち言ったことやろ。

秋穂 …。

千夏 …。

総二郎 そうなんか。

正嗣 ちよつとこっちの病院が心配で…。

総二郎 まあな：

正嗣 あと：子ども産んでから早めに働きに出たいっち：自分の家を建てるの：秋穂の夢やけん、頑張ろうと思ってくれたんよな。気持ちは嬉しいけど、子育ても大変やろうし。

秋穂 そうじゃなくて：

千夏 違うよ、正嗣さん。

正嗣 え？

千夏 秋穂が傷ついたんは、そこじゃないです。

秋穂 姉ちゃん：

千夏 秋穂に聞きました。正嗣さんが言ったこと。

秋穂 姉ちゃん、お父さんおるけん：

千夏 いい！ そんなこと。

正嗣 あのだ：僕が：何、言いましたか：？

千夏 家を建てる場所を相談してた時：秋穂は、ここ：実家のあるこの町はどうかって聞いたんですよね。

正嗣 え、ああ：（秋穂を見る）

千夏 何て答えましたか？

正嗣 ……

秋穂 ……

千夏 「あんな先のない田舎町」うち：笑ったんですよ、この町のこと。

間。

千夏 ふいに出た言葉で：その一言で、真実が見えたんですよ。正嗣さんが本心ではこの町を：見下してるうち：秋穂はそれが、悲しくて、悔しくて。おっしゃる通りですよ。どんどん若い人が減って、どんどん衰退して。店も病院も少なくて不便やし：面白いところもないし：でも、秋穂にとってここは故郷です。結婚して家を出たって、この家が紛れもない「我が家」なんです。バカにされたくない：そんな場所じゃない。自然がいっぱい、人があたたかくて：優しい町なんです！何でバカにされんといけんの、何で見下されんといけんの、田舎の何が悪いん、私たちの何が悪いん！

間。

千夏 ごめんなさい：ちよっと：私情が入っちゃった：

秋穂 姉ちゃん：

千夏 ：ごめんなさい。言いすぎた。

台所から幸枝が顔を出す。

幸枝 ：どうしたんね。

正嗣 ：すみません。

総二郎 いや：いやいや：

正嗣 でも：あれは秋穂だって冗談で言ったんです：

千夏 え：？

正嗣 そうやったやろ？ 俺の職場も遠いし：色々、無理やんか、どう考えても：

秋穂 ほら：バカにしちよん：！

正嗣 違うっちゃ！：秋穂、本気じゃなかったやろ：？

秋穂 ：本気やったよ。

正嗣 嘘や。

秋穂 嘘じゃないっちゃ！

正嗣 だって、そういう言い方やった、わかるよ。秋穂は昔から都会に住みたがっちよ
ったし：

千夏 …。

秋穂 うるさい：

正嗣 俺だってここは好きやけど：ここには住めんっち秋穂だってわかって：

秋穂 やめてよ！

秋穂はお腹を抱えて身を屈める。千夏は秋穂の肩を支える。
その姿に正嗣はハツとする。

正嗣 あ：ごめん、大丈夫？ お腹：大丈夫？ あ：（皆の顔を見て）俺：あの：すみ
ません：すみませんでした！

正嗣、縁側に土下座する。

総二郎 正嗣くん：

襖から春樹が出てくる。

春樹 顔上げよ。正嗣くんは何も悪くない。

正嗣 お義兄さん：でも：

春樹 何言いよんのか、お前達。バカバカしい。

千夏 何なんその言い方：私はわかる。：秋穂の気持ち、わかる：

春樹 わかるとかわからんとか、どうでもいいわ。お前らは、ここを出た。お前らはこ

こに戻らん。それだけやろ。

千夏 ：兄ちゃんだって：

春樹 そうや。俺達が先に捨てたんや。正嗣くんの言うことに、周りのやつと言うこと

に、俺達が文句言う権利あるんか。俺だって田舎もんっちどれだけバカにされてきたか。でも、それを捨てようとした俺たちも同罪や。それが現実やろうが。

千夏 ：：：～

秋穂 でも：それでも、正嗣さんには、この町をバカにせんで欲しかったけん：

正嗣 ごめん：！

総二郎 そげなこと、俺達だってわかっちゃよんわ：それでん、俺達はここで生きること

しかできんけんなあ。ここで生きてきたけん。ここ以外に生きたい場所がないんやわ。みんな、そうや。

正嗣 僕は：本当に失礼なことを：すみませんでした：！

千夏 ううん：正嗣さん、ごめんなさい。

秋穂 姉ちゃんは悪くない、私が：ごめん：
春樹 誰も悪くねえわ。

皆、春樹の顔を見る。

春樹 どうしようもないんや。この町は。

千夏 うん。

総二郎 ：（皆の顔を見て）大丈夫や！ うん、大丈夫。

千夏 お父さん：

総二郎 いいちゃ。いずれどうなったって、お前たちが帰る所が今ここにあるっちいうことだけで、いいんやねーんな？ 俺はそれでいいと思うちょん。

幸枝 そうよ：そう、そう！ 私、ここが大好きやもん。ここであんた達が帰って来るの待っちょんけん：それが生き甲斐やけん！

秋穂 お母さん：

幸枝 ほら、正嗣さんもで！ すき焼きできたで。食べていかんね？

正嗣 お母さんのすき焼き：（泣）

秋穂 何泣きよんの！

正嗣 この町、好きなんです。本当なんです：（泣）

秋穂 わかったっちゃ：

正嗣 ごめんな、秋穂：

千夏 正嗣さん、本当にごめんなさい。

正嗣 いいんです：もっと叱ってください：

秋穂 なんじゃそら。

幸枝 な、みんなで食べような。

幸枝、台所に入っていく。

総二郎 さ、腹減ったなあ。春樹、座れ。ほら、みんな。

春樹 ：父さん。

総二郎 春樹。そういうことやけん。お父さんとお母さんはずっとここにおるけん。ど
うしようもなかったら、いつでも、帰って来い。な。

春樹 ：うん。

総二郎 千夏は、落ち着くまで、ここにおればいい。

千夏 ：うん。

総二郎 秋穂はー：とりあえず、帰れ。

秋穂 (笑) わかったわ！

みんな、笑い合っている。

秋穂　：なんか、デジャブ。

正嗣　え？

秋穂　ほら、今みたいな会話：何か前にもしたことがある気がする。

千夏　えー？　こんな話、そうそうせんやろ。

春樹　：真っ暗闇や。

秋穂　え？

千夏と秋穂　：（思い出して）ああゝゝゝ！

幸枝の声　あーいけん！！

幸枝、しゃもじを持って入って来る。

幸枝　炊飯器、スイッチ入れてなかった：！

全員で笑いながら幸枝に文句を言う。春樹はため息をついている。

ひよっこりと鶴田親子が垣根の向こうに顔を出す。どうやら一部始終覗いていた様だ。

ストップモーション。

明るい音楽と共に動き出し、またみんなが家の家具を変えていく。

この更に十八年前。一九七五年。
夏。七月末の午後。セミの鳴き声が聞こえる。
庭には向日葵が咲いて、緑が生き生きとしている。
壁には子どもの書いた絵が貼られている。部屋の隅には扇風機。
襖や戸は開けっ放しになっている。

千夏の声 秋穂——！ 舞ちゃん！

十歳の秋穂と十二歳の舞が元気いっぱい走り込んでくる。
二人でノートを開いてクスクス笑っている。

舞 あ、ちいちゃん来る！

秋穂 ひゃー！

舞と秋穂は庭に隠れる。
十二歳の千夏、怒った様子で入って来る。

千夏 今、何持って行ったん！ このく…庭に隠れたな

舞・秋穂 きゃー！

千夏 やっぱり！ こら、待てー！

二人で逃げ回って遊んでいる。秋穂はノートを持って逃げ回っている。
舞が逃げると十六歳の春樹にぶつかる。

舞 うわっ！

全く動じない、春樹。

黒縁メガネをかけ、勉強道具を持っており、いかにもガリ勉風。

舞 いったー！

千夏 舞ちゃん、何笑いよったん！

舞 なんでもないっちゃ！ ちよつと春ちゃん！ 急に出て来んでよ！

春樹 …痛い。

秋穂 （現れて）ベーだ！

千夏 あ！ 秋穂！

舞 （大笑い）あきちゃん、わりー！

春樹 …（耳を塞いで）うるさい。

舞　ちいちゃん、ごめんごめん！　私が悪いんよ！　ちいちゃんのノート、もう見ら

んけん！

千夏　秋穂！　何勝手に見せよんの！

秋穂　ごめん、ごめん！

千夏　見た？

秋穂・舞　見た（にやにや）

千夏　うわ、腹立つ！　いいやろ、私が何を切り抜こうが！

舞　いや、すごい可愛かったよ！　センスいいと思う！　私！（特徴的な笑い声）

千夏　舞ちゃん、絶対思っていないやろ！

秋穂　姉ちゃんがアイドル好きとはね

千夏　あ、きくほく

秋穂　きやく！

春樹　ちよっと、今から友達来るけん。

千夏　え？　何か言った？　兄ちゃん。

春樹　友達が来るけん！

秋穂　友達？　：お兄ちゃんの？

春樹　他に誰の友達なんか。

舞　えー春ちゃん、友達おったん！

秋穂　舞ちゃん、しっ！

春樹 (台所を覗く) 母さんは？

千夏 あ、畑にさっきおったけど。

春樹 お前たち、どっか行かんの？

千夏 何で？

春樹 二階暑すぎるんよ。

秋穂 あゝ窓開かんの困るよね

春樹 どこも立て付け悪いし：ほんとこの家は：

千夏 ちよつとやめてよ、そういう言い方。

春樹 ここでやる(勉強道具を広げる)お前たちうるせーけん、どっか行って。

千夏 (カチンとくる)：どっか行ってっち：

舞 ちいちゃん、まあまあ：

千夏 ふん！ わかったわ！ 出ていけばいいんやろ、出ていけば！

千夏が廊下に行こうとすると、古城讓司(十六歳)が入って来る。

讓司 ちわーっす！

千夏・秋穂・舞 ぎゃー！

舞 古城酒店！

讓司 あれー舞ちゃん！ 遊びに来てたん。

舞　ちいちゃんともお酒の配達頼みよんの？

千夏　えー知らんけど：

春樹　ジヨジヨ、お前呼び鈴くらい鳴らせよ。

秋穂　ジヨジヨ！？

譲司　古城譲司、通称ジヨジヨっす！　いや、外から春樹が見えたもんやけん！

春樹　言ったやろ、友達来るっち。クラスメイト。

舞　え！？　古城酒店、高校生やったん：

譲司　なあ春樹、海行こうぜ！　あ、川釣りもいいな、釣り行こう！　釣り！

春樹　は？　何言いよんの。勉強するぞ。

譲司　勉強！？　夏休みに入ったばかりなのに：お前、夏休みを何やと思ひよんの！

春樹　お前こそ夏休みを何やと思ひよんのか。嫌ならいっっちゃ。俺は勉強するけんお

前は海でも山でも行けば。

譲司　ええく：このクソ暑いのに家で勉強なんか：

千夏　（小声で）それやけん友達できんのやっちゃ：

譲司　めちやめちや格好いいなあ、春樹は本当にもう！　やるやる！　俺もやる！

千夏・秋穂・舞　えく：

秋穂　変わった人やなあ：

千夏　じゃあ、やっぱここでは遊べんか

舞　なあ、うちに遊びに来ん？　今日兄ちゃんおらんけん、オセロできるかも！

秋穂 オセロ！ やる、やる！

千夏 おお、いいね〜！ いててみよう！

秋穂・舞 やってみよう！

千夏と秋穂と舞、賑やかに去っていく。

譲司 妹かく：うち、男ばかりやけんさ〜。いいなく可愛いなあ〜。

春樹 気持ち悪っ。お前、帰れ。

譲司 冗談、冗談〜。

春樹の勉強道具を借りて、譲司もペンを握る。

譲司 : 春樹、やっぱ、東京の大学とか考えよんの？

春樹 東京かはわからんけど：うち私立は無理やろうし。国立で：なるべく上目指したい。

譲司 すっげ〜お前、すっげ〜！

春樹 考えよんだけですげ〜とか言われても。お前は店継ぐん？

譲司 え？ うん。

春樹 : 何で？

譲司 いや、ずっとそのつもりやったし。

春樹 継ぎたくねーんやろ。

譲司 そんなことないっちゃ。

春樹 長男やけん我慢するん。

譲司 我慢っちいうか：勉強好きじゃねーし。店の手伝いもさ、嫌いじゃないんや。町

中の人とバカみたいに仲いい父ちゃん母ちゃん、尊敬しちよんし。

春樹 へえ：

譲司 大学とか行く金もないんやけど！

春樹 俺は絶対ここ出る。

譲司 え？

春樹 大分出る。

譲司 え、何で？

春樹 うんざりなんや。田舎は。みんなそうやろ。

譲司 俺は好きやけどなあ。

春樹 嘘つけ。こんな何もねえとこ：

台所から幸枝が顔を出す。春樹は話を隠すように中断する。

幸枝 あら？ お客さん？

讓司 あ、お邪魔してまっす！

幸枝 あらゝあらあらあら。宿題しよんの？ お茶飲む？ 暑いやろ？

讓司 ありがとうございまっす！

幸枝 あらゝあらあらあら…（台所に入る）

讓司 何かお母さん、すごい、あらあら言いよるけど。

春樹 気にするな。

幸枝 （また顔を出す）古城さんとこの、あのゝ

讓司 はい、古城讓司です、ジョジョって呼んでください！

幸枝 え？ 何ち？

春樹 気にしなくていいから。

幸枝 えっと…ジョンジョンくんは、春樹と仲が良いの？

春樹 ジョ…

讓司 はい、同じクラスっす！

幸枝 そうなんやゝ（居間に入って来る）春樹がいつもお世話になってますゝあの、学校でどうなんかね、この子、ちゃんとしてますかね？

春樹 家庭訪問じゃないんやけん…

讓司 いやゝ昔っから学年トップで、先生にも生徒にも、注目の的っちいうか！

幸枝 本当？ 迷惑かけてるんやないやろか…

讓司 ないです、ないない！ 春樹くんはめっちゃ格好いいっす！

幸枝 ええ、本当！

春樹 母さん、お茶！

幸枝 あ、そうやった！ いけんいけん： （また台所に入る）

譲司 面白いお母さんやなあ。

春樹 （ため息）抜けちよんのや。お前、勉強しよんの？ しゃべってばっかで。

譲司 しよん、しよん！

少し静かに勉強をしている（譲司はフリ）と、幸枝がお茶とバナナを持ってくる。

幸枝 どうぞ。

春樹 何故バナナ：

幸枝 え、だって、あんた、食欲ない時はバナナやる？

春樹 今出さんでも。

譲司 え、春樹、体調悪いん？

幸枝 この子、昔っからすぐお腹壊すんよ。期末テストの時、無理したんやと思うわ。

譲司 ええ、そんなに勉強したん！

春樹 しちよらん。

幸枝 プレッシャーに弱いけん：でも、バナナならいつでも食べられるんよ。ね！

春樹 余計なこと言わんでいい！

幸枝 ごめん、ごめん。あ、蚊取り線香しようか。虫がよう入るけん。

譲司 ああ、大丈夫っすよ、うちも似た様なもんっす！

幸枝 うちはどうも窓やら立て付けが悪いけん：

春樹 そうや。二階の窓、何とかならんの？ ただでさえ暑くてたまらんのに。

幸枝 あゝあんた達の部屋なあ。それでここで勉強しよんのやね。お父さんに見てもら

わんとね。

春樹 父さんにも直せんのやろ？ どっか頼んでよ。

譲司 窓、開かんの？

幸枝 中途半端に動かなくなつて。ほら、春先に大きい地震があつたらろ？ あん時から。

譲司 ああ、揺れましたたよねゝあん時：湯布院とか庄内とか、ひどかつたっすよね：

幸枝 なあ、大変やつたよなあ：。裏の山も土砂崩れしてなあ：こないだの大雨も、冷

や冷やしたっちゃ。最近何か災害続きで怖いよなあ：

春樹 雨も入るけん、ビニールしちよんけど：あの窓：

幸枝 わかつた、わかつた。やつぱり修理屋さん呼ばんとねえ。それじゃ、勉強頑張っ

てな。ジョーンくん、ごゆっくり。

春樹 ジョ：（ため息）

幸枝、台所に戻って行く。譲司は春樹をじっと見る。

譲司　ますます好きになる俺。

春樹　は？

譲司　いやいや！　やっぱり人間、こうでなくっちゃな

春樹　：やっぱり二階でやる。お前帰れ。

譲司　え、え、待って待って。一緒にやるっちゃ

春樹は勉強道具を持って二階へいく。

譲司はバナナとお茶を持って春樹を追っていく。

三時間程後、夕方。

暗くなり、少し雨の音がしている。

居間で千夏はテレビを見ている。秋穂は転がっている。

秋穂　いいなくいいなく：いいなく

千夏　もう、うるさいな。

秋穂　お父さんをお願いしてみようか

千夏　すれば？

秋穂　姉ちゃん言ってよ

千夏 何で私なん！

秋穂 お父さん、姉ちゃんの言うことなら聞いてくれるやん

千夏 そうかなあ？ お母さんに言ってみれば？

秋穂 お母さんに言っただって、「そうやね」っち言うだけっちゃ

千夏 舞ちゃんとは親戚が横浜におるけん。

秋穂 いいなあ：何でうちの親戚は田舎者ばかりなん。

千夏 そんなこと言っただって。都会の何がいいん。

秋穂 え、オシヤレな町並みに、オシヤレな服を着たオシヤレな人がいっぱいおるんよ。

東京行ったら百恵ちゃんに会えるかもしれんし

千夏 いや、そんなことはないやろ：

総二郎の声 ただいまー

総二郎、少し濡れてしまった様子で部屋に入って来る。

千夏・秋穂 おかえり

総二郎 あゝ（ハンカチで身体やカバンを拭いている）

幸枝が台所から顔を出す。

幸枝 あら、降り出した？

総二郎 ほんの小雨やわ。タオルくれんかな。

幸枝 はいはい：あ！ お父さん、着替えたら二階の窓、見てくれん？ 子ども部屋。

総二郎 ああ、わかった。

幸枝 あ、いけん！ シーツ干しっぱなしやった！ あー大変！

幸枝、急いで台所の方へ（奥の裏口へ）

総二郎 ……タオル：

千夏、タオルを持って来る。

千夏 はい。

総二郎 おお、ありがと、ありがと。

千夏 父さん、秋穂が夏休みどっか行きたいっち。

総二郎 いいな。海に行くか！ 山か！

秋穂 あ、いや：

総二郎 そうや、宮崎のおいちゃんどこ行くか！ どうもろこしやらスイカやら山ほどできるけんの、海も行けるし、電話しちみるわ！

総二郎、部屋を出ていく。

秋穂 はく…

千夏 うちの家族は都会とか無理っちゃ。

秋穂 姉ちゃんも行きたいくせに。

千夏 え？

秋穂 姉ちゃんのノートの切り抜きさ、本当はアイドルじゃなくて、洋服が好きなんやろ？

千夏 …そうやけど。

秋穂 やっぱりな！ 姉ちゃんも本当は、オシャレしたいんやろ？ お買い物、行ってみたいんやろ？

千夏 そりゃ…私だって…

幸枝、シーツを取り込んでくる。

幸枝 あくちよっと濡れたな

千夏 お母さん、夏休み、どっかいかん？

幸枝 どっかつちう？

秋穂 モダンな服が欲しい！ お買い物行きたい！

幸枝 ああ、わかったわかった！ 今度連れてっちゃんな！ トキハ！

千夏・秋穂 ……

千夏 ……まあ、まずはトキハやな。

秋穂 そうやな。トキハからやな。

幸枝 (シーツを) こうしてかけちよこうかな…あ、もう夕飯できるけんな。ちよっと待ってな。あとお魚焼くだけ。

千夏 手伝おうか。

幸枝 あ、大根剃ってもらおうかなあ。

話しながら幸枝と千夏が台所に行く。

秋穂はまた部屋に転がる。

千夏の声 秋穂―。あんたもおいで―

秋穂 ふわーい…

立とうとした時、秋穂は何か異変を感じる。

秋穂 ん？

ドドドドという低い音。家具の揺れる音。部屋の明かりが揺らぐ。

秋穂　また地震：！？

幸枝と千夏が秋穂のところに走り込んでくる。

幸枝　秋穂！

幸枝は秋穂と千夏を抱きしめて身体を小さくする。

ドドドドという低い音。棚から物が落ちる。三人は揺れに耐える。そして、揺れは収まる。

千夏　止まった：

幸枝　まだ動かんのよ。こないだは何回も揺れたやろ？

秋穂　怖い：

千夏　こないだのよりは小さかったね。

幸枝　：もう来んかな：お料理の火、止めたっけ：

春樹の声　母さん！　母さん！（ドタドタと走る音）

幸枝 え？

千夏 え、どうしたん！

幸枝は春樹について外に出ていく。

幸枝 お父さん！ お父さん、大丈夫？！

玄関の方から庭に回って、総二郎が春樹に肩を貸り、足を引きずって歩いてくる。

総二郎 あたたた：

秋穂 え、何、どうしたん！

春樹 窓から落ちた。

幸枝・千夏・秋穂 ええっ！？

幸枝 落ちた！？

春樹 窓の様子見よったら、揺れて、窓が外れて：

総二郎 花壇があったけん、どうにかうまく落ちたで（笑）あいたたた：捻挫したかな。

幸枝 大丈夫！？ 折れてない！？

千夏 病院！

総二郎 いや、そんな大したことないわ：

秋穂 木があつて良かったなあ：

総二郎 命拾ひしたわゝ：：でも、窓、どげえしようかな。

秋穂 部屋が濡れたら嫌やー

千夏 タタミとか悪くなるよなあ

総二郎 ビニールでもいいけんとりあえず塞がんな：よし：（歩こうとする）あたた
た！

幸枝 お父さん、無理せんで！ 私が：

その時、部屋の電気が消える。

秋穂 ひゃっ！

千夏 停電？

総二郎 ああ、まいった：

秋穂 お母さん、怖い！

幸枝 こっちおいで！（肩を抱いて）大丈夫、大丈夫よ：

春樹 …。

春樹は部屋を出ていく。

幸枝 春ちゃん！ どこ行くん…！

総二郎 おい、あぶねえぞ！ ええと、母さん、ランプがあったかな。

幸枝 えっと…玄関にたしか…

春樹、玄関から懐中電灯とランプを持ってきて、ランプを千夏に渡す。

春樹 千夏、ここ頼んだ。

千夏 えっ！

春樹 みんな、ここおっちよって。母さん、大きいビニールないかな。

幸枝 え、台所の開きにいっぱい入れちよるけど…春ちゃん、危ないけん、電気ついてからにせんね。

春樹 部屋が濡れたら困るやろ。

幸枝 …やけど…

春樹 大丈夫や。俺んちや。目つぶっても歩ける。

総二郎 おい！

春樹 父さん！ いいけん、動かんで！

春樹、台所へ行く。

総二郎 あいたたたた：

幸枝 お父さん、大丈夫？

千夏 とにかく、私たちはじっとしちよこう。兄ちゃんは大丈夫やわ。

幸枝 でも：

秋穂 あ：今ちょっと揺れた？

幸枝 うん：もう強いのはこんよね：

春樹、ビニールとガムテープを持って居間に戻る。

春樹 母さん、ガス止めたけん。

幸枝 あ！ ありがとう！

春樹 お皿が割れちゃったけん、後から行く時、足元、気をつけて。秋穂、これ食べちよけ。大丈夫やけん。

春樹、秋穂にチョコレートを渡して、二階へ向かう。

秋穂 ：なんか、兄ちゃんじゃないみたい：

総二郎 長男なんやなあ：あいつ：

少しの間。秋穂はチョコレートをみんなに渡す。

幸枝 いいん？ いったも頂戴っち言ってもくれんのに。

秋穂 今日はみんなで食べる。

幸枝 ありがとう。

総二郎 はく：やっぱり高い金払ってでん、いい大工に頼めば良かったんや：すまんな

：

幸枝 お父さん。それはもう言わんで。今言っても、な。

秋穂 え、何、何？

幸枝 何でもない、何でもない。

千夏 ：なあ、兄ちゃんさ、最近おかしくない？

幸枝 え？

千夏 イライラしちよんっちいうか：ピリピリしちよんっちいうか：

総二郎 そういう年頃なんやろ。

千夏 なんか、やたら勉強ばかりするし。

秋穂 それはいつものことやん。

千夏 いや：なんか、急に切羽つまったみたい。

秋穂 兄ちゃん。：今日だけ。

皆、少し笑う。

幸枝 いつまでも子どもじゃないんよな：。みんないつか、ここを出て行くんかなあ：

千夏 お母さん、私はここにおるけん。

秋穂 ：私も。

千夏と秋穂は寂しそうな母の腕を抱きしめる。幸枝は二人の頭を撫でる。

総二郎 春樹は春樹のやりたいように、行きたいところに行けばいいわ。そんぐらいじ

やねーとな、男は。

千夏 長男やのにいいん？

総二郎 縛られる必要はないわ。可愛い子には旅をさせな。

秋穂 可愛くはないやろ！（笑）

総二郎 それでダメになったら戻ってくればいいんや。お父さんとお母さんはずっとここに
おるけん。どこに行っても、いつでも帰って来ればいい。それでいいんや。
お前たちもな。

千夏 うん。

秋穂 うん！

幸枝 その為にこの家を建てたんよ。な、お父さん。

総二郎 そうやったなあ。

雨音が強くなっていく。

幸枝 ああ：雨が強くなってきた。ちよっと二階見に行くわ。

千夏 危ないっちゃ。：お母さんはここにおっちよって。

幸枝 でも：

千夏 私が行ってくる。

総二郎 おい、千夏、電気がつくまで待て：

千夏 大丈夫！ 兄ちゃん心配やもん。私だって、この家の長女やし！

千夏が部屋を出ようとする、一瞬の光。雷が落ちる音。
と同時に男の影が見える。

男の声 ぎゃーっ！

千夏・秋穂 きゃーっ！

そして、電気がふとつく。そこに立っているのは、讓司。

千夏　：ジヨジヨ！！

讓司　あー！　びっくりしましたね、今の雷！

千夏　あなたのほうがびっくりしたわ！！

讓司　いや、家に帰ってからまた揺れたでしょ。窓が壊れてるっち言いよったの思い出

して、大丈夫かなっち思って！

幸枝　わざわざ来てくれたん？　ありがとう。

総二郎　すまん、二階を見てきてくれんか？　春樹が一人で窓を塞ぎよるんや。

讓司　：春樹ならここにおりますよ。

秋穂　え？

讓司　：なんか、泣いてます。

皆、廊下の方に目をやる。

幸枝は廊下に出て、座り込んで泣いているらしい春樹に、微笑みかける。

すすり泣きが聞こえ、皆少し戸惑いながら、笑う。

短いストップモーション。

ゆるやかな音楽の中、また家の家具が動かされていく。

明るく賑やかに飾られていたものがどんどんなくなっていく。

やがて、板とタタミ、大きな家具が置かれただけの、何も無い部屋になっていく。

更に十七年前。一九五八年。春。

庭は何もされていないが、花が咲いている。

小鳥のさえずりの中、若い夫婦がこの家に入って来る。

二十七歳の総二郎と、二十二歳の幸枝。

幸枝はお腹が大きく、小さな荷物だけ持っている。

総二郎は持ってきた風呂敷に入れた荷物を部屋の隅に置き、忙しく家中を見ている。

幸枝は大きく息を吸って、幸せそうに息を吐く。

幸枝 立派な家やねえ：

総二郎 …すまん、すまん、幸枝。

幸枝 総二郎さん。

総二郎 いや（家を見ながら）もっと大きい、立派な家を建てたかったんやけど：

幸枝 十分ですよ。

総二郎 …知り合いの大工に安く頼んだもんやけん、ほら、窓とか…ボコツと取れやせ

んかな：

幸枝 (笑) そんなことあるわけないじゃないですか。今度地主さんと大工さんにお礼に行きましょう。

総二郎 本当はもっと庭も広く取りたかったんや。子どもが走り回れるような…
幸枝 総二郎さん。

総二郎、やっと動きが止まる。

幸枝 私にはもったいないくらいです。夢みたいです。こんな素敵な「我が家」を持つるなんて。これ以上贅沢言ったら、罰が当たりそうや(笑)

総二郎 : 今まで辛抱させて、悪かったな。

幸枝 辛抱なんてしてません。

総二郎 兄さん達とも、母さんとも、俺がもつとうまくやれば、もう少し一緒におられたかもしれん : 早く家を建てたくて : こんな家しか建てられんで : すまん :

幸枝 謝らないでください。

総二郎 これからも苦勞させるかもしれんけど :

幸枝 私は幸せです。

総二郎 : (微笑む) ありがとう。 : ああ、荷物 : お前はそこに座っちよって。

総二郎は荷物を取りに玄関へ向かう。幸枝は座って家を見る。

幸枝　これから、ここで、生活が始まるんやねえ：（お腹に）ほら、あなたのおうちですよ。小さいけどお庭がある。お砂遊びができるかね：お花を植えようかね。お野菜は作れるかね。あなたとお父さんに、栄養いっぱい食べさせんといけんもかね。

総二郎、荷物を持って戻って来る。いつの間にか立っている幸枝。

総二郎　ああ、また。疲れちよんのやけん、座っちよけ、な。

幸枝　ここで、三人家族になるんですね。

総二郎　うん。

幸枝　ねえ、総二郎さんは女の子がいいんでしょう？

総二郎　母さんが男、男、言うんがうるさかったけんそう言ったけど、どっちでもいいんや。俺は。

幸枝　ああ、そうやったんですね。

総二郎　どっちでも、元気に生まれて来てくれれば。

幸枝　男の子やったら、お父さんに似て優しい子になりますね。きっと。

総二郎　いやいや、男らしいといいなあ。勉強よりも、運動や！　野球とかなあ、友達が
がいっぱいできるものがいいわ。

幸枝　そうね。元気いっぱいいでねえ。女の子やったら？

総二郎　幸枝に似て、奥ゆかしい子になるやろうなあ。

幸枝　（笑）私はのんびりしちよんけん、似たらようないわ。

総二郎　女の子は、幸せな結婚してくれれば、それだけでいい。できれば遠くへは行か
んで欲しい：

幸枝　気が早いわ（笑）

笑い合っている二人。

何度も座らせようとするが、立ち上がってしまふ幸枝。

幸枝　みんなが「ただいま」ち帰って来てくれるんやね。

縁側から玄関の方を見つめる。

幸枝　そのの玄関から、総二郎さんも、この子も：「ただいま」っち：ああ、何て幸せ
なんやろう。

総二郎　そうやなあ：その為の家や。

幸枝　うん。

総二郎　：本当はもっと立派な：

幸枝 総二郎さん、もう言わんで（笑）

総二郎 ああ：すまん、すまん。あ、表の荷物片付けんと！ じゃあ、幸枝は休んでな。

幸枝 ……ありがとう：総二郎さん。ありがとう。

総二郎が部屋を出て行き、幸枝はこの家のこれからを夢見ている。

そして、だんだんとこの部屋に荷物が運び込まれてくる。

そして現在、二〇一九年の姿に戻る。

夜。十九時過ぎ。

六十歳の春樹が、カレンダーをじっと見ている。

台所から千夏が現れ、春樹の姿を見て、腹立たしそうに通り過ぎ、居間に座る。

お茶と茶菓子を用意している。

襖を開けて、聖が顔を出す。

聖 お母さん、お風呂は？ おばちゃん出たら入れば？

千夏 ああ：お母さん、後。今から：な。

聖 （春樹を見て）：ああ：

千夏 みんなは？ 二階？

聖 うん。スウィッチで盛り上がったよん。

千夏 あの高そうなゲーム。

聖 すごいよ、あの兄妹（笑）おじちゃんも本気やし。

千夏 ：あんたもやってきよ！

聖 うくん：

そこに、かのんともえが顔を出す。

かのん 聖ちゃん、聖ちゃん！

聖 え？

もえ 面白いもの見つけたに！ 一緒に見らん？

聖 何？

かのん アルバム！ 上で、母さんが片付け途中になっちゃって。

千夏 もう、秋穂はく

もえ おばちゃん、ごめん、後でうちらで片付けちよくけん。

千夏 （笑）よろしく。

聖 アルバムっちいつの？

かのん 超昔の：（もえと目を合わせて笑いながら）とにかく面白いけん：：！

もえ （春樹をちらりと見て笑いながら）べんぞう：：！

かのん もえ！

聖 え？ べんぞう？

かのん いいけん！ 来て来て来て！

そこに、風呂上りの秋穂が居間に入って来る。

秋穂 お風呂、出ましたよ：：何盛り上がっちゃよんの？

かのん 何でもなくい！

もえ 行こう、行こう！

聖 うん：

秋穂 あ、それ：まあ見てもいいけどさ：：

秋穂とかのん、もえが話している間、聖は春樹を見て、千夏の肩をそっと叩く。

千夏 大丈夫。ありがと。

聖 （千夏に微笑んで、かのん達に）アルバム、見せて、見せて！

聖、部屋を出て行く。

秋穂 まあ、楽しければいいわ。あつ美味しそう！ そのチョコ。

千夏 やろ？ 見つけるとつい買ってしまふんよねー。特にあんたがおると思ったら。

秋穂 お母さんみたい（笑）

千夏 。（春樹の方を見る）

秋穂 。（兄ちゃん、お茶入ってるよ。）

春樹 。（ああ。）

千夏 。（。）

三人が居間のこたつに座る。

千夏 もう一回、落ち着いて、三人で話そうな。

秋穂 。（うん。）

千夏 。（。）

秋穂 。（。）

春樹 。（父さん、落ちたな。）

千夏 。（え？）

春樹　：俺が高校の時：地震で窓が外れて。

秋穂　そうやったなく：！

千夏　どしたん、急に。

春樹　：この家、何回も改修工事して。父さんがすまん、すまんっち。母さんはもう言わんでっち。あの会話何回聞いたかな。

秋穂　：うん。私たち里帰り出産する時も、赤ん坊の為に改装してくれたね。

千夏　あの頃は迷惑かけたなあ：

春樹　：こんな家：よう長いこと住んだわ。

千夏　ちよっと：

春樹　でもここが無くなったら。

千夏　：。

春樹　この家が無くなったら：どこに帰ればいいんか。俺達は。

秋穂　：兄ちゃん。

千夏　：。兄ちゃんは：整理がつかんのよね。そりゃそうやわ。ずっと家に帰らんかったんやけん。お母さんのことも、たまにしか見らんかったんやけん。

春樹　：。

千夏　秋穂は言わんけど：母さん、どんだけ兄ちゃんに会いたがっちよったか：

秋穂　姉ちゃん：

千夏　母さん見送る覚悟からも、この家を手放す覚悟からも：兄ちゃんはずっと逃げち

よったんよ。でも本当は：わかつちよんのやる：？

少しの間。

春樹　：バカみたいやな。

秋穂　え？

春樹　普通に考えて、管理できるわけないんや。管理できんで、死んだままこの家があったって、何になるんや。わかちよんのや。こういう日が来るのは、ずっとわかつちよったんや。

千夏　うん：

春樹　何でカレンダー変えんのか。

秋穂　え？

春樹　あんなもんがあるけん、決心ができんくなるやねーな。

秋穂　：じゃあ兄ちゃんが変えてよ。

春樹　できるか。

秋穂　できんやん：できんやろ：

千夏　：。

千夏、立ち上がってカレンダーをはがす。

秋穂 あ：

千夏 捨てんといけんの。だって、私たちが帰る家は：ちゃんとあるんやけん。私たちが今の自分の家族を守らんといけんの。やけん：手放さんといけんの！

千夏は破ろうとするが、破れない。

千夏 ：何で：お母さんのバカ：何でこんなこと書くんよ：私たちが捨てられんやない

：毎年毎年：八月と十二月：私たちが帰って来る月：

「バナナ、ジャムパン、チョコレート」：

春樹 バナナ：

千夏 ジャムパン：

秋穂 チョコレート：

春樹 俺、バナナが好きとか言った覚えないんやけどな：

千夏 私はお父さんとお母さんに「お前好きやろ」っち言われて、「別に」っち言えんくなつて。

秋穂 私はずっと好きで。

春樹 お前は成長してねーんや。

秋穂 え

春樹　こんなカレンダーに書かんでも覚えとけっちゃ。

千夏　忘れたらいけんっち思いよったんよ。

秋穂　だいぶわからんくなりよったもんね。

春樹　秋穂：苦劳かけたな。

秋穂　：別に。みんな仕事しよんし：私は一番近くにおったけん。

千夏　子供たちもおったし、秋穂も大変やったろうに：ごめんね。本当にありがとう。

感謝してる。

秋穂　：ううん。

春樹　：ありがとうな。

秋穂　：：兄ちゃんからやっと聞いたわ、その言葉。やった。

春樹　何かそれは。

秋穂が笑い、春樹と千夏も笑う。春樹は家を見渡す。

春樹　正式に相談しよう。

千夏・秋穂　え？

春樹　この家を手放すのがいいかどうか：もう一度、改めて。

千夏　：何よ：昼間は園田さんにあんな態度とって。

秋穂　そうよ。

春樹 悪かったわ。(園田の残した資料を広げる) 読んだ。長引かせてもいいことはない。

千夏 うん。

春樹 貸し手がおらんなら、壊すのが妥当やと思う。：今年が、ここでの最後の年越しかもしれないな。

千夏と秋穂は泣き始める。

秋穂 園田さんに、連絡するわ。

春樹 うん。頼むわ。

秋穂 でも、一回貸し手がおらんか、探してもらわん?

春樹 おらんとするけど：どんなもんか聞いてみたらいいわ。

千夏 : 兄ちゃん、すぐ処分するっち言うと思えばよかったんで、私たち。

秋穂 なあ。そんなに思い入れあったなんて。

春樹 思い入れかわからんけど。お母さんの葬式の時に、お母さんが施設に入る時のこと思い出して。そこ(縁側)に、ぼんやり座っちよって。そんな時に、この家を無くしたくないっち思って。

千夏 何か話したん?

春樹 : いや：ボケちよったけん、会話はできんかった。

春樹は縁側を見つめている。

千夏 壊したくないなあ：捨てたくないなあ：何もかも。お父さんが一生懸命建てた家

お母さんが毎日毎日掃除して守ってきた家：

春樹 ：父さんと母さんみたいに、俺達がならんといけんのや、今度は。

千夏 うん。私は、聖の帰って来る場所にならんと。

秋穂 ああ、私、なれん、お母さんみたいに。

春樹 父さんみたいになれんわ、俺も。

千夏 ：お義姉さん達、元気？

春樹 多分。

千夏 兄ちゃん、不器用やけんなあ。大丈夫？

春樹 お前こそ。ずっと一人でようやるわ。

秋穂 姉ちゃん、すごいよ。聖ちゃん、本当にいい子やもん。

千夏 秋穂のとも皆いい子やん。

秋穂 え、どこが：

千夏 よく周りを見ちよって、明るくて。聖なんかああ見えて結構気が強いんで？

春樹 お前の子やけん仕方ないわ。

千夏 もう！

秋穂 (笑)

春樹 それで、千夏にちよつと、話があつてな：

千夏 え？

急に居間に讓司(六十歳)がやってくる。昔とほとんど変わらない。

讓司 ちわーっす！

千夏・秋穂 うわー！

春樹 お前は何で呼び鈴を鳴らさないんだ、ジョジョ。

讓司 いや、外から春樹が見えたけん。

千夏 わ、わ、ジョジョや！

秋穂 ジョジョ！

千夏 変わりませんねえ：！

讓司 いや、ご無沙汰してます、春樹から色々話聞いて。こうなったらもう飲むしかないっち。

千夏 わー出た、古城酒店！

讓司 細々と続いてますよ

千夏 ああ、昼間、兄ちゃんが呼び出されたっち、ジョジョやったんや。

秋穂 古城酒店、よく続くよなあ、この田舎町で。

譲司 俺はここが好きやけん、ここで続けられることばっかり考えてきたけん。みんな酒は好きやけん、配達とか重宝されるし、地酒のネット販売始めたら当たってなあ！

千夏 へー！ ネットでも売りよんの！

譲司 山の方では民泊とかして、若いもんに興味持ってもらう運動もしよってな。

秋穂 なんか：この町もまだ、頑張りよんのやな：

千夏 すごいやん、ジヨジヨ！（譲司を叩く）

譲司 （嬉しそうに）あはっあはっそうかなあ

春樹 おい：（小声）なんで来るん、俺が先に話をするっち：

譲司 （小声）いや、だってほら、回りくどいことするより、会った方が。（千夏を見ている）

秋穂 やだ、私、スッピンやし。

千夏 そう変わらんっちゃ。

秋穂 え、そう？ まだまだいける？ 私。

千夏 お化粧いっつもてきとうやん。

秋穂 そっちな！ 姉ちゃんはいつも綺麗にしちよんもんなあ。いい人がおるけんかしら

春樹・譲司 え？

秋穂 そろそろ籍入れてもいいんやないん？

千夏 ええ？ いや、そんなこと考えてないけん。

秋穂 老後のこととか考えんと。聖ちゃんかもし結婚とかなったら、姉ちゃん一人になるんよ。

千夏 そうやな：考えちよくわ。

春樹 お前、誰か、相手がおるん。

千夏 え？ うん、まあね。

春樹 そういうのは：教えといてくれんと：（譲司を見る）

譲司 ::::春樹。何だろう、この気持ち。いつか感じたことがある。

春樹 飲もう、飲むぞ、ジヨジヨ！

譲司 よし、よし！

千夏 あ、じゃあ、おつまみ持って来るよ。正嗣さんも声かけたら？

秋穂 そうやな。正嗣さん！

千夏 この家の最後の年越しや：舞ちゃんヨネさんも誘ってみようか！

秋穂 いいなあ、あの笑い声聞きたい！

千夏 楽しくなってきたな！

千夏は台所に入ってグラスやつまみをとってくる。

春樹は譲司を慰めている。正嗣がやってきて秋穂と座る。

聖とかのんともえが笑いながらアルバムを持ってきて、輪に加わる。

そこに鶴田親子が顔を出し、中に入っていく。
どんだん部屋が賑やかになっていく。

ふと、賑やかな居間が薄暗くなる。

子どもの頃の千夏と秋穂が走り回り、下手の次の間で背比べをしている。
幸枝と総二郎が二人を囲んで笑っている。

縁側には、若い頃の幸枝と総二郎が幸せそうに赤ん坊を抱いている。

浮かんでは消えていく、この家に染み付いた沢山の思い出たち。

静かに部屋が浮かび上がる。

誰もいない部屋。

六十歳の春樹が一人、部屋に入りカレンダ―のあった壁を見つめる。
縁側にふと光が差し、いつかの声が聞こえてくる。

年老いた幸枝の声　おかえり…

振り返る、春樹。縁側の光が消える。

春樹、縁側を見つめ、ゆっくりと去っていく。

家の姿が浮かび上がる。

この家は確かに生きていた。

彼らは生きた家にいた。

そしてこれからも、この家は彼らの中で生き続ける。

幕。